ぼくのあな

小林里々子
Kobayashi Ririko

チカンがいる。夕暮れの、薄紫色した住宅街に身を潜めている。十字路でブロック塀にほとんど体を隠しながら下校途中の子供を探している。小学校高学年から中学生くらいの、ひとりで歩く、細身で、童顔の、誰でもいい誰かを。条件に適う子供はなかなか現れなくて、チカンはときどき道に迷ったふりをして地図を見ながら歩き回る。六時を過ぎたというのに気温は下がらない。だから色は目を痛める真っ青から薄紫へ変わっても相変わらず真夏日だ。チカンの着ているオレンジ色のTシャツは首回りと背中と脇が濡れて濃い。ときどき袖口で流れる汗をぬぐった。この地区は、とチカンは思う。もうあんまりいい子がいないのかもしれない。

透はひとりで帰る。教室から校門を出てバス停を過ぎるまでずっと下を向いて白いスニーカーだけ見て歩く。更に目を細めたりして、視界はわりと自由がきく。だけどミュージックプレイヤーは校則で持ってきちゃいけないことになっているから耳は塞げない。指で塞ぐことは可能だけど不可能だ。だってそれをしたら目立つ。誰にも認識されないように帰りたくて、でもそんなことできないからせめて自分が誰のことも認識しないように五感を殺そうとしているのに、目立つなんて、ナンセンスだ。一回、口の中だけでひとりごとを呟いて外の音を遮断しようとしたことがある。効果はあった。周囲の音は聞こえにくくなるし、ひとりごとの中身に集中するから聞こえても意味はわからないまま通り抜けていった。クラスにいるときにも応用してみた。一日に四回ある休み時間と、長すぎる昼休みをそれでやりすごした。でもいつのまにかひとりごとは漏れ出ていて、「キモ」と、いう言葉を浴びた。小さなひとりごとでは全然全く遮れない「キモ」。透はすぐさま呟くのをやめる。

だから聴覚には対処のしようがなくて音は拾われている。

狭い道にひしめきあう生徒たちの喋ることと笑い声。透はそれの全部全然聞きたくない。だけど鼓膜に届けば脳味噌が解読する。そうして目をあげなくても景色が見える。いちょうが緑の葉を揺らして、その向こうに市役所の六階の窓が三つ見えて、大きな団地が三つ続く視界。

その中に、ひとりで帰ってる生徒はいない。

でもぼくはひとり。

顔が、熱くなる。浮き出た鎖骨に開襟シャツが貼り付く真夏日のせいじゃなく。赤くなったら嫌だから少しは体温の低い手を広げて頬と額にあてた。どん、とぶつかられて少しつんのめる。大きな笑い声をたてながら透を追い越していく同じシャツを着た四人組。知らない顔だったし誰も透を振り返ったりしなかったけど透の顔はもっと熱くなった。透は恥ずかしい。

同じ学校の生徒が見えなくなってやっと視線は前を向いた。ひとりは危険だ。恥ずかしいだけじゃなく危険だ。学校から遠く離れるほど、恥ずかしいと危険の量は逆転する。かつあげされる。中学にあがってから二年で二回あった。だから周囲を見渡す。二人以上の男子を見かけたら別の道を行く。コンビニの前は誰もいなくても小走りする。警戒は怠らない。弱ければ食べられる。だけど透が警戒するのは自分の年齢プラスせいぜい五、マイナス一の、集団だったから、なにをするでもなく突っ立った二十代半ばに見えるマスク姿の男が視界に入っても、それは見えてないのと一緒だ。気温は三十度をまだ超えている。風邪をひいたからってマスクをする季節じゃない。でも透は疑問を抱かずに通り過ぎる。一歩。二歩。三歩。チカンがマスクから外れた黒目を前後左右に走らせる。四歩。チカンの一歩。五歩。チカンが走り出して、六歩を踏み出す前に透の腕は捕らえられる。自分を食べる強者はここにはいないと思っている透は事態が理解できないまま、連れ込まれる。アパートの階段脇に覗き込まなければ見えない死角がある。チカンはここに来て最初にそういう場所を探して見つけていた。透の肩の上から汗ばんだ腕が白いシャツに沿って降りてくる。腕に生えた濃い毛が皮膚と擦れてしょりしょりと音をたてた。二階から首を突き出した位置からなら、壁の位置でちょうどチカンの顔が隠れて、二本の腕は透の肩にくっついているみたいに見えた。透の細くて白い体にはアンバランスな、筋肉で膨らんだ毛深い土気色の腕だから少年漫画かアメコミに出てくるしょぼい悪役にいそうな奇矯さだ。一本が顎を包み込んで口を塞ぐ。古い油のにおいが混ざった汗臭さに咳

き込みそうになる。もう一本が慣れた手つきでベルトとジッパーを外す。ようやく、透は力関係を理解する。知らない強者が現れて警戒しきれなくて捕獲されたのだとわかる。

食べられる。

抵抗しようとした瞬間手が顎から首に滑って絞められた。同時に優しく大丈夫、と囁かれる。

透は表情を失った。

家に帰るまでに透はアパートの三階に住む主婦ひとりと警官三人と関わる。全員知らない人だ。それから担任教員にはこの日二度会う。チカンは逃げて捕まらない。どこかに逃走してもう透の前に姿を現すことはない。別の場所で別の子供を探し回る。この界隈はもう限界だと見切って。チカンは透の前に半径二キロの範囲で五人、同じ手口を使っている。五人は全員小学生で男の子だ。だから小学校ではもう数ヶ月前にチカン被害に気をつけましょうの注意がなされていた。

翌朝、予定外の全校集会が開かれる。体育館の、緞帳と緞帳のあいだに校長が立っている。定年まであと半年の六十才。その半年をどう穏便に過ごすかを考えている。もうほとんど余生だ。変質者の出没注意ならこれまでにも経験があったけれど今回のケースは老人には理解しがたかった。嫌な話だ、と思う。最初に聞いたときから嫌悪感を露わにしていた。あっちゃいけないことだよこんなのは、と、担任にいった。担任も同意する。だからいわなくていいことも口走る。

気をつけなさい。男も性被害者になる世の中なんですよ！

さざ波みたいに揺れていた三百二十二個の頭がぴたっと停止して校長を見つめた。目が六百四十二個壇上に向かう。ふたつ足りない。右から九列目前から十番目の位置にいる被害者本人だけが下を向いている。ことこまかになにが起きたのかを語る校長の声を透は聞く必要がない。だけどやっぱり聞こえて、解読されて、透は我慢できなくなって耳を折りたたむ。耳たぶを穴に押し込む。目も瞑る。そんなことしたって五感は全然殺せない。脳みそは壇上に昨日の午後五時十七分から二十五分までの透を作り上げる。そっくりそのままの形で。チカンは腕だけが再現される。透に見えていたのはだってほとんど腕だけなのだ。

ぼくはここにいるのに。

透は体育館で全校集会に出席している。

なのにいま、壇上で、触られてるのは、ぼくだ。

透は首筋から耳まで赤くなる。実際は、トランクスの中に湿り気を帯びた腕は侵入しなかった。上から数度撫でさすられてはいたけれど、皮膚と皮膚は直接触れてない。それは現れた主婦によって阻止された。でも壇上の透は全身をくまなく触られている。六百四十二個の目で。

それには校長の眼鏡の奥の皮で埋もれそうな眼球もふたつ含む。だとしたらまたふたつ足りない。今度もすぐわかる。だって彼は一番前にいる生徒だから。十三列目の、一番前。出席番号順で並んでも背の順で並んでもどちらにしろ変わらないその位置に龍がいる。あどけない、といってもいいような幼い顔の主な原因である大きくて睫毛の反り返った目は壇上ではなく自分の後ろの、自分より背の高い誰かを捜してさまよっている。

「チカンされたってアレ、お前じゃーねえの？」

といった声の主を捜している。右の肩越しに視線を走らせていると左側の腰をこづかれた。少し前まではこういうことをやってくるのは同じ小学校出身の生徒だけだったけれど、いまは中学校で合流した、龍のよく知らない生徒も仲間に入っているから見当をつけにくかった。龍はあきらめて前を向く。俺はいまイライラしてるよ、と思う。それから頂点極めてるかどうかも判断する。知らないうちに爪が食い込むくらい強く握りしめていた拳を眺めて極めてる、と思う。きっと顔も赤いんだろうと予測する。予測の通りこめかみから目元にかけて龍の皮膚は染まっている。赤というよりピンク色だけれど。

じゃあ、数にいれていいな。

龍はカウントする。

続きは本誌で！